

「近代仏教稀少雑誌コレクション」解題

大谷栄一(佛教大学)

近代仏教の形成と雑誌メディア

本コレクションは、明治時代に刊行された仏教雑誌のうち、計 18 誌、全 1,050 冊の電子データを収載したオンライン・データベースである(一部、大正期、昭和初期までの雑誌を含む)。これまで研究者の間で注目される機会が少なく、国会図書館にまとまった所蔵がない雑誌を集めたことから、「近代仏教稀少雑誌コレクション」と名づけられた。

ここでいう「近代仏教」とは、明治維新(1868 年)からアジア・太平洋戦争の敗戦(1945 年)までの時期の日本仏教を意味する(あるいは明治維新から現代までの日本仏教と捉える立場もある)。いわば、前近代の伝統仏教が近代化した仏教のことをいう。「仏教モダニズム」とも呼ばれる。2000 年代以降、近代仏教の研究が国内外で大いに発展している¹。

仏教の近代化について、傾聴すべき見解を提示しているのが、「類似宗教」学者の吉永進一である。「仏教の近代化とは、仏教が(日本の)寺院から出て行く過程だと言ってもいい」。吉永はそう述べる²。その指標として、①大学制度の創設と学術の発展、②メディアの拡大、③国際化の進展を挙げる。以下、吉永の議論のポイントを確認しよう。

明治維新直後の廃仏毀釈のダメージを経て、明治 10 年代後半以降、東本願寺の僧で東京大学に学んだ井上円了(1858～1919)は、仏教改革論を次々に発表した。以降、哲学や仏教学など、西洋の学術を学んだ仏教系知識人たちが大学を拠点に活躍し、仏教各宗派が大学(宗門系大学)を開設した。大学で近代仏教学や各宗派の宗学を学ぶという(現代でも見られる)しくみがこうして成立した。

また、明治 10 年代以降、日本各地で仏教結社が誕生し、定期刊行物(機関誌)を発行した。その結果、明治 20 年代に仏教新聞・雑誌の出版が急増する。本コレクションに含まれた雑誌もその多くが明治 20 年代以降に創刊されたものである。さらに、日本ローカルの仏教運動が英語仏教雑誌を刊行し、海外の仏教徒とのネットワークを構築するのも明治 20 年代以降のことである。

これら 3 つの指標が密接に絡み合いながら、仏教の近代化(すなわち近代仏教の形成)が進んだ。雑誌メディアの出版がその原動力になった。

明治時代の仏教界における新聞・雑誌の発刊

「新聞」や「雑誌」自体が近代の新しい印刷メディアである。慶應 4 年(1868)に柳河春三が日本人として最初の新聞『中外新聞』を創刊する。明治3年(新暦では 1871)には日本初の日刊紙『横浜毎日新聞』が発刊された。また、雑誌の嚆矢となったのは、慶應 3 年(1867)に柳川によって創刊された『西洋雑誌』である。政治家の森有礼が中心となり、福沢諭吉、中村正直、西周らの知識人によって明治 7 年(1874)に創刊されたのが、『明六雑誌』である。

こうした動向を受け、仏教界の取り組みは早かった。明治 5 年(1872)に『教義新聞』、明治 7 年(1874)に『報四叢談』が発刊されている。それに先立ち、明治 4 年(1871)には真宗大谷派の機関誌『配紙』も刊行された。また、仏教界全体の情報を報道した仏教新聞(宗教新聞)として、『明教新誌』(明治 8 年創刊)³と『中外日報』(明治 30 年創刊)が有名である(後者は宗教・文化専門紙として現在も刊行されている)。ちなみに、現代の月刊総合雑誌『中央公論』の前身は、西本願寺の普通教校(現在の龍谷大学)の学生たちによって結成された禁酒団体・反省有志会(のちに反省会)の機関誌『反省会雑誌』(明治 20 年創刊。のちに『反省雑誌』)であることはあまり知られていない。

では、一体、明治期にどれくらいの新聞・雑誌が刊行されていたのだろうか。

明治仏教史編纂所が編集・刊行した『明治仏教史編纂所蔵目録』(1972 年)に掲載された「明治年間創刊の仏教関係」の新聞・雑誌リストを見ると、760 余の新聞・雑誌が紹介されている。しかし、私たちの共同研究「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」の調査チームで再調査した結果、その数は 896 紙・誌に及ぶことがわかった⁴。

すなわち、明治時代の仏教界では約 900 を数える膨大な数の新聞・雑誌が発刊されていたのである。今回のコレクションでは、そのうちのごく一部を厳選した。

「明治仏教史編纂所」という研究機関

上記の『明治仏教史編纂所目録』を編集した明治仏教史編纂所(以下、編纂所)とは、どのような組織なのだろうか⁵。この研究機関は、昭和 8 年(1933)3 月に東京銀座に創設された。明治仏教史料の収集を目的とし、『明治仏教史』全 12 巻の刊行をめざした(ただし、後者は戦災のため、実現せず)。この事業を計画し、主導したのが、仏教学者の友松円諦(1895～1973)である。友松は昭和 9 年(1934)3 月のラジオ「聖典講義」で行った『法句経』の講義が大きな反響を呼び、「宗教復興」と呼ばれる仏教ブームのきっかけを作った人物としても有名である。

慶応義塾大学と大正大学で教鞭を取っていた友松は、昭和 2 年(1927)にヨーロッパに留学し、ドイツとフランスで仏教の法制経済、インド仏教の説話・史伝物語の研究に取り組んだ。フランスで師事した著名なインド学・仏教学者のシルヴァン・レヴィ(Sylvain Lévi, 1863～1935)か

ら、「今のうちに明治仏教史料を集めておくように」と助言されたことで、近代日本仏教の価値に気づいたという。昭和 6 年(1931)4 月に帰国した友松は恩師の助言を忠実に守り、全国各地で精力的に史料収集を行い、『中外日報』や『現代仏教』などの新聞・雑誌に史料の提供を呼びかける広告も掲載した。

こうした活動を超宗派的な共同事業によって行うための研究機関として設立されたのが、編纂所だった。じつは、大正後期から明治時代を回顧する風潮が高まっていた。大正 9 年(1920)11 月の明治神宮の創建前後から、明治時代の回顧的研究が盛んになる。当時の仏教アカデミズムでも、「明治仏教」の回顧的研究が行われ始めていた。たとえば、昭和 5 年(1930)8 月刊行の『龍谷大学論叢』293 号は「明治仏教研究」を特集している。昭和 8 年(1933)7 月には、雑誌『現代仏教』で「明治仏教の研究・回顧」が 780 頁にわたって大々的に特集された。

こうして明治時代と明治仏教の回顧の機運が高まる中、編纂所の活動が実施された。その成果は、昭和 9 年(1934)7 月に『明治年間仏教関係新聞雑誌目録』(明治仏教史編纂所)としてまとめられた。A5 版の全 48 頁からなり、明治年間に創刊された約 760 種類の仏教関係の新聞・雑誌のリストを収録している(このリストが前述の『明治仏教史編纂所蔵目録』に再録された)。

ここで、昭和 9 年の目録に掲げられた「仏教関係新聞雑誌目録編纂に就て」(研究員の上坂倉次が執筆)に着目しよう。約 760 種類の新聞・雑誌のデータは集めたものの、実際に編纂所で集めることができた現物は約 270 種類で、リストの 36%に過ぎなかったと述べている(ただし、私たちの共同研究で再調査した明治仏教新聞・雑誌の多くは、全国の大学図書館・研究機関に所蔵されている)。

それらの新聞・雑誌の現物はアジア・太平洋戦争の戦災を免れ、昭和 22 年(1947)に東京外神田に落成した神田寺内(に移設された編纂所)に収められた。その後、昭和 58 年(1983)に慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫に寄託され、現在に至る。今回のコレクションのデータの原本は、斯道文庫と神田寺の許可・協力によって提供された明治仏教史編纂所の蔵書である。

以上のように、90 数年前の昭和前期に収集された明治時代の雑誌が令和の時代に電子データとして甦ったのである。

本コレクションの収載雑誌の特徴

では、本コレクションの収載雑誌(計 18 誌)はどのような特徴があるのだろうか。収載雑誌を発行開始年順に並び変えたのが、図1である。

図1 「近代仏教稀少雑誌コレクション」収載雑誌一覧(発行開始年順)

雑誌名	発行元	宗派	DB収録号	収録先	備考(創刊年、前誌、後続誌、発行元等)
『崑山片玉』	明教社	通宗派関係	『明教新誌』第575号(明治11年1月)～第161号(明治18年7月)	第一部	明治11年11月創刊。
『諸宗説教案内誌』	明教社	通宗派関係	第1号(明治13年3月)～第153号(明治20年6月)	第三部	明治13年3月創刊。
『教学論集』	無外書房	通宗派関係	第1編(明治16年10月)～第13編(明治18年1月)	第二部	明治16年10月創刊。
『能潤会雑誌』	能潤会事務所	浄土宗関係	第1号(明治18年8月)～第33号(明治21年5月)	第一部	明治18年8月創刊。明治21年7月に『能潤新報』に改題されたのち、明治22年3月に『仏教』に改題。
『四明餘霞』	比叡山延暦寺文書課	天台宗関係	第1号(明治21年1月)～第28巻第3号(大正4年5月)	第二部	明治21年1月創刊。
『仏教』	能潤社(のちに仏教会)	通宗派関係	第1号(明治22年3月)～第18年第12号(明治35年12月)	第三部	明治18年8月に『能潤会雑誌』として創刊され、明治21年7月に『能潤新報』に改題されたのち、明治22年3月に『仏教』に改題。発行元は明治22年3月の創刊時に能潤社、明治24年9月に仏教会に変更。
『十善宝窟』	十善会(のちに目白僧園)	その他	第11輯(明治24年2月)～第45輯(明治26年12月)	第三部	明治23年4月創刊。発行元は十善会、明治25年3月に目白僧園に変更。
『伝道会雑誌』(のちに『伝道新誌』)	真宗青年伝道会	浄土真宗本願寺派関係	第5年第3号(明治25年3月)～第8年第12号(明治28年12月)	第二部	明治21年6月創刊。明治25年4月に『伝道新誌』に改題されたのち、明治36年1月に『布教叢誌』に改題。
『三宝叢誌』	令知会	浄土真宗本願寺派関係	第121号(明治27年4月)～第344号(大正元年11月)	第二部	明治17年4月に『令知会雑誌』として創刊され、明治25年3月に『三宝叢誌』に改題。
『和融誌』	和融社	曹洞宗関係	第30号(明治32年8月)～第16巻第12号(大正元年12月)	第一部	明治30年3月創刊。
『宗粹』(のちに『宗粹雑誌』)	宗粹社	浄土宗関係	第41巻(明治33年6月)～第6巻第12号(明治35年12月)	第一部	明治30年2月に『宗粹』として創刊され、明治33年7月に『宗粹雑誌』に改題され、明治38年9月に『宗教界』に改題。
『同胞』	布哇仏教青年会	通宗派関係	記念号(明治39年10月)～第10巻第5号(明治42年5月)	第二部	明治33年10月創刊。
『通俗仏教』	光融館	通宗派関係	第1号(明治33年11月)～第3巻第11号(明治36年11月)	第三部	明治33年11月創刊。
『信仰界』	浄土宗伝道会	浄土宗関係	第1巻第1号(明治35年1月号)～第4巻第6号(明治38年6月号)	第一部	明治35年1月創刊。
『天台』	護法会	天台宗関係	第20号(明治37年12月)～第180号(大正9年2月)	第二部	明治36年6月創刊。
『緑山』	大本山増上寺文書科	浄土宗関係	第1号(明治38年7月)～第27集第3号(昭和6年5月)	第一部	明治38年7月創刊。
『貫練叢誌』	貫練会	真宗大谷派関係	第7編第2集(明治43年2月)～第8編第12集(明治44年12月)	第三部	明治31年4月に『貫練会報』として創刊され、明治37年1月に『貫練叢誌』に改題されたのち、明治45年1月に『貫練』に改題。
『貫練』	真宗大谷大学内尋源会雑誌部	真宗大谷派関係	第9編第1集(明治45年1月)～第18編第1集(大正10年1月)	第三部	明治31年4月に『貫練会報』として創刊され、明治37年1月に『貫練叢誌』に改題されたのち、明治45年1月に『貫練』に改題。

明治 10 年代に創刊された雑誌が 4 誌(『三宝叢誌』の前身『令知会雑誌』を加えると 5 誌)、明治 20 年代の創刊誌(含継続誌)が 5 誌、明治 30 年代(含継続誌)の創刊誌が 7 誌(『貫練叢誌』『貫練』の前身『貫練会報』を加えると、8 誌)、明治 40 年代(含継続誌)の創刊誌が 2 誌である。つまり、その多くが明治 20 年代に創刊されている。

明治 10 年代に創刊された『崑山片玉』と『諸宗説教案内誌』は、前述の『明教新誌』の発行元である明教社が刊行した雑誌である。『崑山片玉』は各宗派の祖師や先徳の法語、諸宗派の法義を集めたものであり、『諸宗説教案内誌』は僧侶の説教の参考になる珍しい話やアイデア、実際の説教・講録・説話を載せた説教のマニュアル本、ネタ本である。また、『教学論集』は福田行誠(1809～1888)、原坦山(1819～1892)、島地黙雷(1838～1911)ら、当時の仏教界を代表する仏教系知識人の教説を収録している。

こうした法話や説教、講録、説話、演説、講演のアンソロジーは、これ以降、雑誌のみならず、本としても出版され、近代日本における仏教界や出版界のキラーコンテンツだった。

ここで注目をしたいのが、前述した明治 10 年代以降の仏教結社の存在と雑誌の関係である。近代仏教研究の開拓者の一人、池田英俊によれば、仏教界での教会・結社の設立運動(結社運動)は明治 8 年(1875)の大教院廃止と明治 10 年(1877)の教部省廃止という明治政府の宗教政策の転換期を境に開始され、明治 17 年(1884)の教導職(明治政府の教化政策を担当した無給の国家官吏で僧侶も参加)の廃止前後に最盛期を迎えたという⁶。明治 10 年代から 20 年代初頭にかけて、400 余りの仏教各宗派と諸宗派共同(通仏教＝通宗派)の教会・結社が結成されたことが明らかになっている(うち後者は 224)。

池田は『明教新誌』の記事にもとづき、通宗派の教会・結社のリスト(名称、所在地、結社の種類等)を挙げている。これを見ると、雑誌名も併記されているものがある。両教社(京都、明治 13 年創立、『両教雑誌』)、真法会(東京、明治 14 年創立、『真法雑誌』)、令知会(東京、明治 17 年創立、『令知会雑誌』)等である。

このうち、僧俗を問わない通宗派的立場に立つ令知会は、学術と布教を軸として結成された。ただし、実質的には東京に拠点を持つ浄土真宗(真宗本願寺派と真宗大谷派)の僧侶たちを中心とする結社だったことを、仏教史家の近藤俊太郎は指摘する⁷。『令知会雑誌』では、キリスト教への対抗、仏教改革論、仏教と国家との親和性等が主張されたという。本誌は明治 25 年(1892)には本コレクション収載の『三宝叢誌』に改題される。

池田は、明治 17 年(1884)の教導職廃止前後を仏教教会・結社の「最盛期」と捉えているが、私は仏教教会・結社の盛況は明治 20 年代以降も発展的に続き、そうした教会・結社の組織化は仏教雑誌の創刊・出版と連動していたのではないかと考える。

たとえば、本コレクション収載の能潤会(明治 18 年創立)の『能潤会雑誌』(未収録の)反省会(明治 19 年創立)の『反省会雑誌』(のちに『反省雑誌』)、真宗青年伝道会(明治 21 年創立)の『伝道会雑誌』は、いずれもそうした仏教結社の機関誌という特徴をもつ。このうち、浄土宗系の能潤会は「講義演説ヲ以テ仏教ノ真理ヲ拡張シ僧侶ノ運動ヲ活発ナラシムル」ことを掲げた結社

である(『能潤教会仮規則』『能潤会雑誌』第1号、[資料番号 b 000317](#))。

つまり、明治 10 年代以降の仏教界の結社運動と雑誌メディアは連動していたのである。

なお、『十善宝窟』は、真言宗の律師・釈雲照(1827～1909)が設立した目白僧園という学校の機関誌である(明治 20 年に戒律学校として創設され、明治 23 年に目白僧園に改称)⁸。

先に見たように、『反省会雑誌』は西本願寺の普通教校の学生によって出版され、前述の『伝道会雑誌』が大学林(現在の龍谷大学)の学生からなる真宗青年伝道会によって刊行されたように、大学と結社、雑誌メディアも密接に結びついていた⁹。とりわけ、これらの結社は、仏教改革を主張した青年たちの仏教青年運動という特徴があった¹⁰。

明治 17 年(1884)の教導職の廃止によって、仏教教団は宗派ごとに宗制寺法を制定し、自治的な近代的教団の形成を図った。各宗派は自前の印刷メディアを整備し、機関誌を通じて宗派内の情報を各寺院に伝達していくことになる。『日蓮宗教教報』(明治 18 年)、『浄土教報』(明治 22 年)、『密厳教報』(明治 22 年)など、各宗派の機関誌の発行は明治 18 年(1885)以降に盛んになるが、本コレクション収載の『四明余霞』もそうした背景の下、明治 21 年(1888)に創刊された天台宗の機関誌だった。

明治 30 年代の多様な仏教雑誌

明治 30 年代は、近代仏教研究(とくに明治仏教研究)にとって特筆すべき時期である。というのも、近代仏教研究の開拓者の一人、吉田久一によれば、「仏教の近代化の二本の線」である清沢満之(1863～1903)の精神主義と、境野黄洋(1871～1933)、高嶋米峰(1875～1949)ら仏教清徒同志会(のちに新仏教徒同志会)の新仏教運動が立ち上がり、展開されたからである。前者は機関誌『精神界』を明治 34 年(1901)1 月に、後者は機関誌『新仏教』を明治 33 年(1900)7 月にそれぞれ創刊した¹¹。いずれも従来の仏教のあり方や仏教界を批判する仏教改革的な志向性を有していた。

本コレクションには、『新仏教』への道筋をつけた雑誌『仏教』を収めた。本誌の主筆を務めたのが、古河老川(1871～1899)である。和歌山の真宗本願寺派寺院に生まれた古河は普通教校に入学し、反省会のメンバーとして、『反省会雑誌』の記事執筆と編集を担当した。明治 22 年(1889)に上京し、東京の仏教青年会運動に参加し、明治 27 年(1894)に経緯会という結社を設立する。翌明治 28 年(1895)1 月、古河は『仏教』の主筆に就任する。この雑誌は浄土宗系の『能潤会雑誌』(のちに『能潤新報』)を源流とし、明治 22 年(1889)3 月に通宗派系の『仏教』に発展した。古河の主筆着任後、『仏教』はより先鋭的な仏教改革論を説く雑誌となる。同誌 83 号(明治 27 年 1 月)に掲載された古河の社説「懷疑時代に入れり」は「改革派の晩鐘」¹²と評された論考である。

古河をはじめ、経緯会の杉村広太郎(1872～1945。楚人冠)や境野黄洋らが誌上で仏教改

革を主張するも、古河は明治 32 年(1899)11 月に結核のため、29 歳の若さで亡くなる。その跡を継いだ境野や杉村たちが(古河逝去前の)同年 2 月に仏教清徒同志会を結成するのである。

真宗大谷派の清沢満之は、明治 30 年(1897)10 月、『教界時言』12 号に論説「貫練会を論ず」を発表する¹³。当時、真宗大谷派は幕末の大火と戦火で焼却した阿弥陀堂と御影堂の「両堂再建」と、明治維新政府に求められた献金による負債の増加、両堂再建のための膨大な出費による「債務償却」という問題を抱えていた(ただし、明治 27 年に負債を完済、翌年 4 月に両堂を落成)。

そうした東本願寺本山の状況に対して、明治 28 年(1895)7 月、清沢ら 12 名は寺務改正の建言書を提出する。翌年 10 月、清沢ら 6 人が主唱者となり、洛北の北白川村に拠点を定め、教界時言社を設立し、機関誌『教界時言』を創刊する。教学本位の精神的革新を説き、宗門改革運動を立ち上げた(いわゆる白川党事件)¹⁴。自分たちの主張を発表するための雑誌メディアだった。

運動は急激な広がりを見せ、明治 30 年(1897)2 月に大谷派革新全国同盟会が結成されるも、清沢ら 6 名が本山から除名処分を受ける。11 月に同盟会は解散。『教界時言』は翌年 3 月に廃刊となり、運動は終結した。こうした運動の最中で発表した清沢の論説が前述の「貫練会を論ず」だった。

貫練会とは——真宗教学に精通している名和達宣によれば——清沢らの革新勢力に対抗して、明治 30 年(1897)7 月 24 日に結成された、江戸以来の宗学の伝統を師資相承する団体である¹⁵。いわば、革新派に対する保守派の立場に立つ団体である。この貫練会の機関誌が翌明治 31 年(1898)4 月に『貫練会報』として創刊され、明治 37 年(1904)1 月に『貫練叢誌』に改題された。当時、貫練会は高倉大学寮内にあった。その後、明治 44 年(1911)9 月に真宗大学(東京)と高倉大学寮(京都)が統合されて真宗大谷大学(現在の大谷大学)が成立する。その同窓会として、翌年 1 月に尋源会が設立された。その際、『貫練叢誌』は『貫練』と改題され、尋源会出版部から刊行されることになった(「編集室より」『貫練』9 編 1 集、[資料番号 b 019590](#))。本コレクションには『貫練叢誌』と『貫練』を収めた。

本コレクションには、明治 30 年代に創刊された他の雑誌として、曹洞宗大学林(現在の駒澤大学)の機関誌『和融誌』(明治 30 年 3 月創刊)¹⁶、浄土宗の有志による『宗粹』(明治 30 年 2 月創刊、明治 33 年 7 月に『宗粹雑誌』に改題)、黒田真洞らが結成した浄土宗伝道会の『信仰界』(明治 35 年 1 月創刊)、浄土宗の大本山増上寺文書科発行の『縁山』(明治 38 年 7 月創刊)、天台宗の関東の政治勢力・護法会の機関誌『天台』(明治 36 年 6 月創刊)¹⁷、真宗本願寺派関係者からなる布哇仏教青年会がハワイで刊行した『同胞』(明治 33 年 10 月創刊)、明治 23 年(1890)に東京で創業した仏教系出版社・光融館¹⁸が刊行した『通俗仏教』(明治 33 年 11 月創刊)を収めた。『通俗仏教』は宗派に偏ることなく、ひたすら真実円満な仏教の教理徳風をわかりやすく一般社会に普及することを目的として創刊された(「通俗仏教」発行の主意『通俗仏教』第 1 号、[資料番号 b 015937](#))。

以上のように、本コレクションでは宗派を限定せず、さまざまな特徴をもつ多様性に富んだ近代

仏教雑誌(明治仏教雑誌)を収載することができた。

近代仏教雑誌のアーカイブ構築に向けて

本コレクションは、近代仏教雑誌(明治仏教雑誌)の電子データを収載したオンライン・データベースである。いわば、近代仏教雑誌のアーカイブの一部をなす貴重な史料群である。

最後に、あらためて本コレクションの特徴を述べ、近代仏教雑誌のアーカイブ構築のための課題を記しておきたい。

戦前から現代までの仏教雑誌に関する目録・目次・復刻版・データベースなどの資料整備の動向を詳細に整理したのが、宗教人類学と近代仏教史を専攻する武井謙悟である¹⁹。武井は、その資料整備史を以下のように時期区分する。

- A 1895～1922 : 同時代的な把握の必要性から資料保存への意識が発生
- B 1923～1944 : 散逸の危機意識から資料保全の取り組みが体系的に発展
- C 1945～1979 : 戦前期の仏教史復元の試みとしての仏教資料の整理
- D 1980～1999 : 記事内容への分析基盤の形成
- E 2000～現在 : 資料の電子化による資料閲覧・検索の利便性向上

本解題で述べたように、本コレクションの起点は、1930 年(時期区分 B)の明治仏教史編纂所による明治仏教雑誌の資料保全の取り組みと『明治年間仏教関係新聞雑誌目録』(1939 年)の刊行にある。その後、戦後の時期(時期区分 C、D)を経て、現在(時期区分 E)、本コレクションがオンライン・データベースとして公開されたわけである。

その前提として——武井が指摘するように——国立国会図書館デジタルコレクションの公開がある(2002年 10 月から電子化された明治期刊行図書の提供が始まった)。ただし、現時点(2025 年 10 月)では限られた近代仏教雑誌の電子データしか公開されておらず、本コレクションが果たす役割は大きい。

武井によれば、近代仏教雑誌の資料整備(いわば、アーカイブ構築)には、宗派別の傾向があるという。「雑誌の復刻版は浄土真宗、電子版は真言宗、データベースは浄土宗がリードするという特色」である。日蓮宗・禅宗関連の整備が手薄であると指摘する。また、戦前の中国・台湾・韓国で刊行された近代仏教雑誌の整備が不十分であり、東アジアレベルでの資料整備の必要性を説く。いずれも説得的な見解である。

それにくわえて、私は本コレクションに収めることができなかった(幅広い宗派や通宗派の)明治仏教雑誌、(上記の『明治仏教史編纂所目録』に紹介されている)大正・昭和年間創刊の仏教雑誌、(東アジア以外の)海外で刊行された日本語や英語等での仏教雑誌の電子化によるデータベ

ース化も今後、必要であると考え（言うは易く行は難しではあるが）。

本コレクションは、計 18 誌、1,000 冊以上、2 万件に及ぶ膨大な記事を横断的に検索できる特徴をもつ。このデータベースは、近代仏教研究はもちろんのこと、歴史学、宗教学、思想史、文化史、民俗学、出版史、国際交流史など、幅広い領域で活用することが可能である。思ってもみなかった新たな歴史や事実の発見やそのつながりを体験することができよう。本コレクションが多くの人々に多くの機会で活用されることを願う。

近代仏教雑誌の電子化の試みは端緒にすぎたばかりである。この「近代仏教稀少雑誌コレクション」がその発展の礎となれば、と思う。

註

¹ その研究史については、大谷栄一『近代仏教というメディア——出版と社会活動』（ペリカン社、2020 年）「序章 仏教が日本の寺院から出て行く——近代仏教研究の射程」、碧海寿広『近代仏教とは何か——その思想と実践』（青土社、2024 年）「序章 近代仏教とは何か」を参照されたい。

² 吉永進一「はじめに」（大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『増補改訂 近代仏教スタディーズ——仏教からみたもうひとつの近代』法蔵館、2023 年）。

³ 高野山大学附属高野山図書館監修『明教新誌』DVD-ROM(PDF)版（小林写真工業株式会社、2003 年）として電子化され、販売されている。同誌の明治12年(1879)～明治21年(1888)年の目次は、星野靖二作成『明教新誌』目次(β版)（<https://docs.google.com/spreadsheets/d/13UIeNDuEZeeFljoIWKPMlwMq8u-ELovbj57aHDKirPc/edit?gid=0#gid=0>、2025 年 10 月 20 日閲覧）に掲載されている。

⁴ この調査・研究は、科学研究費補助金(基盤研究 B)「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」(研究代表:大谷栄一、JSPS 科研費 JP23320022、2011～14 年度)の一環として行われた。調査チームは、谷川穰(京都大学)と京都大学グループ、江島尚俊(大正大学総合仏教研究所[現・田園調布学園大学])と大正大学グループ、碧海寿広(龍谷大学アジア仏教文化センター[現・武蔵野大学])と龍谷大学グループ、藤本頼生(國學院大學)と國學院大學グループ、私と佛教大学グループから構成された。なお、本共同研究の成果として、「近代日本の宗教雑誌アーカイヴ」(URL: <https://www.modern-religious-archives.org/>、2025 年 10 月 20 日閲覧)がある。本コレクションに収載された 18 誌の目次一覧が本サイトに掲載されている。本サイトが本コレクション作成のきっかけとなった。

⁵ 以下、大谷栄一「コラム 明治は遠くなりけり——明治仏教史編纂所のこと」(岩田真美・桐原健真編『カミとホトケの幕末維新——交錯する宗教世界』法蔵館、2018 年)にもとづく。また、友松諦道・山本幸世編『人の生をうくるは難く——友松圓諦小伝』(真理運動本部、1975 年)、西村実則「ハイデルベルクのヴァレザーと友松円諦」(『総合仏教研究所年報』第 35 号、2013 年)、中西直樹編・解説『明治仏教研究事始め——復刻版『明治仏教』』(不二出版、2018 年)も参照した。

⁶ 池田英俊『明治仏教教会・結社史の研究』(刀水書房、1994 年)。

⁷ 近藤俊太郎「『令知会雑誌』とその課題」(中西直樹・近藤俊太郎編『令知会と明治仏教』不二出版、2017 年)。

⁸ 釈雲照と目白僧園については、亀山光明『釈雲照と戒律の近代』(法蔵館、2022 年)に詳しい。

⁹ 反省会と『反省会雑誌』については、藤原正信「『反省会雑誌』とその周辺」(赤松徹真編『シリーズ近代日本の仏教ジャーナリズム第一巻 『反省会雑誌』とその周辺』法蔵館、2018 年)、真宗青年伝道会と『伝道会雑誌』については、赤松徹真「真宗青年伝道会の設立と機関誌『伝道会雑誌』について」(同)に詳しい。

¹⁰ 大谷栄一『近代仏教という視座——戦争・アジア・社会主義』(ペリカン社、2012 年)「第二章 明治期の「新しい仏教」の形成と展開」参照。なお、本コレクションには収載できなかったが、近年、仏教婦人雑誌の研究も進展しており、岩田真美・中西直樹編『シリーズ近代日本の仏教ジャーナリズム第二巻 仏教婦人雑誌の創刊』(法蔵館、2019 年)が参考になる。

¹¹ 『精神界』は復刻版全 20 巻が法蔵館から 1986 年に刊行されており、『新仏教』は CD-ROM 版がすすざわ書店から 2009～2011 年に発売されている。

¹² 杉村楚人冠編『老川遺稿』(仏教清徒同志会、1901 年)「老川略伝」。

¹³ 『教界時言』は復刻版全 3 巻が不二出版から 2018 年に刊行されている。

-
- ¹⁴ 森岡清美『真宗大谷派の革新運動——白川党・井上豊忠のライフヒストリー』（吉川弘文館、2016 年）参照。
- ¹⁵ 名和達宣「清沢満之を「一貫する」思想——『臘扇記』を手がかりとして」（『現代と親鸞』第 28 号、2014 年）。
- ¹⁶ 林淳「曹洞宗四箇中学林・私考」（『愛知学院大学文学部紀要』第 50 号、2020 年）参照。
- ¹⁷ 明治後期の天台宗における関東の護法会と関西の扶宗会の関係については、藤田和敏「明治後期天台宗における関東派・関西派の対立」（『立命館文学』第 693 号、2025 年）を参照した。
- ¹⁸ 光融館を含めた明治期における京都と東京の仏教系出版社と仏書出版については、引野亨輔『近世・近代寺院蔵書の社会史』（塙書房、2024 年）「第五章 近代仏書出版史序説」に詳しい。
- ¹⁹ 武井謙悟『近代仏教儀礼論序説』（法藏館、2025 年）「補論 近代仏教資料の整備史」。